



**Data**

監督・製作：クリント・イーストウッド

原作：チェスリー・“サリー”・サレンバーガー、ジェフリー・ザスロー『「ハドソン川」の奇跡 機長、究極の決断』（静山社文庫刊）

脚本：トッド・コマーニキ

出演：トム・ハンクス／アーロン・エッカート／ローラ・リニー

## 👁️👁️ みどころ

タイトルをただで、あの時のあの事件が早くも映画に！と驚くが、そんな素材に誰よりも早く目をつけたのが86歳のクリント・イーストウッド監督だからすごい。

日本なら、あんたは偉い！あんたはヒーロー！で終わりそうだが、民主主義の国アメリカでは結果オーライは許されず、サリー機長の決断の妥当性についても国家運輸安全委員会（NTSB）が徹底的な事後検証に乗り出すことに！しかして、その権限は？そのシステムは？

国家運輸安全委員会（NTSB）のこんな「公聴会」のやり方はホントに正しいの？それを含めて、人間の咄嗟の決断の当否についてしっかり考えたい。もちろん、人間は神サマではない。それを大前提としたうえで・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■あれは作りモノ！しかし、これはホンモノ！■□■

旅客機墜落の危機を描いた映画はたくさんあるが、最近ではデンゼル・ワシントンが主演した『フライト』（12年）が面白かった（『シネマルーム30』25頁参照）。同作では激しい乱気流の中を「マニュアル操縦」によって見事に切り抜け、ひと安心した直後に機体に起きた墜落の危機を「背面飛行」によって切り抜けたウィップ・ウィトカー機長が一躍ヒーローに！誰もがそう思ったが、ウィップの体内から高濃度のアルコールが検出されたから、さあ大変。ひょっとして、この男はアル中？さらにはコカインまでも・・・？さらにその後も、同作は「もみ消し」を請け負う弁護士が登場するなど大混乱の展開になるが、これはしよせん作りモノ。

それに対して本作は、タイトルだけ見ても世界中のだれもが知っている「あのハドソン川の、あの奇跡」だからホンモノだ。2009年1月15日、USエアウェイズ1549便に起きたあわや墜落という危機の中、チェスリー・“サリー”・サレンバーガー機長（トム・ハンクス）はハドソン川への不時着という決断を下し、乗員乗客155名の全員生還を果たしたが、これは本当に起きた事件だ。そんな直近のテーマに惹きつけられて、その「ドラマ」の映画化に動いたのがクリント・イーストウッド監督だが、不時着から救出までの時間はわずか30分。そんな現実の事件が映画になるの？誰もがそう思うところだが、クリント・イーストウッド監督がホントに描きたかったドラマとは・・・？

## ■この実在の人物には、トム・ハンクスがピッタリ！■

トム・ハンクスはハリウッドを代表する名優だが、彼の特徴の1つは『アポロ13』（95年）でのジム・ラヴェル船長、『チャーリー・ウィルソンズ・ウォー』（07年）でのチャーリー・ウィルソン（『シネマルーム19』278頁参照）、『キャプテン・フィリップス』（13年）でのリチャード・フィリップス船長（『シネマルーム32』44頁参照）等、実在する人物を演じた映画が多いことだ。それは彼の演技力の賜物だが、本作の企画を決めたクリント・イーストウッド監督は、サリー機長役にはトム・ハンクスがピッタリだとすぐにイメージしたらしい。

たしかに年齢的にも近いから、トム・ハンクスはサリー機長役にピッタリだし、写真に見るホンモノのサリーと本作に見るトム・ハンクスはたしかによく似ている。いくら名優でも、ホンモノの人物で世界中によく知られている人物を演じるのは難しいと思うのだが、トム・ハンクスはパンフレットの「INTERVIEW」の中で「今回ほど細部の正確さにこだわったことはない」と述べている。更に続けて彼は「サリー役を演じるにあたり、何が彼を突き動かしていたのか、それをピュアに表現したいと思った。自分なりのアレンジを加えたり、無理矢理、恐怖や危険を加えるのではなくて。実際には何が起きたのか、彼はどう対応したのかを、見つけたかった。サリーはすべての事柄について細部に至るまで喜んで教えてくれた。あまりにもテクニカルな内容になったときは、もうちょっとレベルを下げてもらえませんか、とお願いしなくてはならなかったけれど（笑）。」と語っているが、本作を観ればそれがなるほどよくわかる。さすが、たいしたものだ。

## ■いきなり手に汗を握る展開に！■

「バードストライク」って一体ナニ？それは鳥がエンジン収容部に入ったため、エンジンが推力を失うこと。航空機のハイテク化が進み、エンジンも日進月歩で性能が向上している現代においても、この自然界に存在する脅威に人類は太刀打ちできないらしい。大勢の乗客を乗せた大型旅客機が上空で「バードストライク」に遭遇し、もし左右の両エンジンとも推力を失えば・・・？

サリー機長が副操縦士のジェフ・スカイルズ（アーロン・エックート）と共にコックピットに乗り込んだUSエアウェイズ1549便は、2009年1月15日ニューヨークのラガーディア空港を離陸した直後、大きな渡り鳥のカナダガンの群れに衝突したから大変。高度わずか約2,800フィート（約850メートル）で両エンジンの推力を失い、70トンの鉄の塊と化した同機は、急速に高度を下げてゆくことに。目の前に迫るのは、人口160万の大都市マンハッタンだ。さあそこでサリー機長はいかなる決断を？

本作は冒頭から、そんな危機的状況の中で管制塔と連絡を取りながらハドソン川への不時着を決断し、それを実行していく姿を映していく。しかし、本作は冒頭からいきなり手に汗を握る展開に！

## ■□■サリー機長の決断は妥当だったの？■□■

エンジンが推力を失えば航空機はどうなるの？そうなればグライダーのように滑空するしか方法はないが、高度わずか2,800フィート（約850メートル）で推力を失えば、その航空機の滑空距離と滑空時間はわずかしかかないのでは・・・？経験豊かな機長であるサリー機長はもちろんそれをわかっていたから、当初考えたラガーディア空港への引き返しもしくはニュージャージーのテターボロ空港への緊急着陸を諦め、目の前に広がっているハドソン川への不時着を決断したわけだ。しかし、その決断の妥当性は？

ラガーディア空港へ引き返した場合、あるいはテターボロ空港へ緊急着陸した場合、その成功の確率は何%？それに対して、ハドソン川への不時着を成功させる確率は何%？コンピューターゲームならパソコンに入力すればすぐに答えが出てくるだろうが、いかんせん人間の頭脳では咄嗟にその確率の判断は無理。したがって、サリー機長は長年の経験と勘でハドソン川への不時着を決断したわけだが、結果は乗員乗客155名の生還に成功したから、万々歳。これにてサリー機長は一躍ヒーローに。ところが、結果よければすべてよしといかないところが本作のミソだ。

果たして、あの時点でのあの決断は正しかったの？ラガーディア空港に引き返すのは不可能だったの？ニュージャージーのテターボロ空港に緊急着陸できなかったの？本当に両エンジンとも推力喪失していたの？不時着水は乗員乗客を命の危険にさらす無謀な判断ではなかったの？国家運輸安全委員会（NTSB）の調査官による度重なる追及は、サリー機長を極限まで追い詰めていくことに・・・。

## ■□■国家運輸安全委員会の権限は？公聴会のシステムは？■□■

7月24日に観た『トランポ ハリウッドに最も嫌われた男』（15年）（『シネマルーム38』123頁参照）はメチャ面白い映画だった。同作は「ハリウッド・テン」と呼ばれた監督、脚本家に対する「赤狩り」がテーマで、マッカーシー議員を中心とした合衆国議会の「下院非米活動委員会（HUAC）」の「赤狩り」活動が興味深く描かれていた。議会

からトランポに送られてきた召喚状に応じてトランポはワシントンD. C. での「公聴会」に出席し、「君は共産主義者か、それともかつてそうだったか」との質問に対し「YESかNOで答えるよう」強要されていたから、その対応は大変だった。

しかして、本作でもストーリー構成のメインは、事故直後に全米のヒーローに祭り上げられたサリー機長に対する、国家運輸安全委員会（NTSB）の公聴会での事情聴取のシーケンスになる。一体何の目的で国家運輸安全委員会（NTSB）は公聴会を開催したの？公聴会はどんなシステムで運営されるの？国家運輸安全委員会（NTSB）の権限は？検事や弁護士はいるの？サリー機長に黙秘権はあるの？公聴会でサリー機長の意見を聞いた後、国家運輸安全委員会（NTSB）はサリー機長に対して何らかの処分を下す権限があるの？

アメリカは民主主義の国だから、そこらあたりのシステムは明確に決まっているのだろう。しかし残念ながら日本人の私には、トランポに対する下院非米活動委員会（HUAC）の権限や公聴会のシステムがわからなかったのと同じように、本作に見る国家運輸安全委員会（NTSB）の権限やシステムもよくわからないから、もどかしい気持ちが湧いてくる。映画の中でのその説明が無理なら、せめてパンフレットでその説明が欲しかったが・・・。

## ■□■一種の法廷劇だが、サリー機長の指摘で状況は一変！■□■

国家運輸安全委員会（NTSB）が主催する公聴会の出席者は多いが、彼らは一体何者？しかし、公聴会での事情聴取の対象とされ、意見を述べることができるのは、サリー機長とジェフ副操縦士の2人だけらしい。また、これはあくまで公聴会だから、法廷のように検事や弁護士はいない。他方、法廷では裁判長が訴訟指揮権を一手に握っているのと同じように、国家運輸安全委員会（NTSB）でも委員長が公聴会全体を仕切っていたから、その指揮が片寄っていれば公聴会全体がへんな方向に流れていく危険がある。そう思っていると案の定、委員長はラガーディア空港へ引き返すシュミレーションとテターボロ空港へ緊急着陸するシュミレーションをスクリーン上で再現させ、出席者は全員それを視聴し始めたからアレ・・・。

そのスクリーンを視聴しているのはサリー機長もジェフ副操縦士も同じだが、そもそもこんなシュミレーションって意味があるの？そりゃコンピューターゲームなら、それに応じたシュミレーションを示し、それなりの結論を示してくれるのだろうが、ラガーディア空港を離陸した直後に機体にバードストライクが発生し、両エンジンの推力を喪失するという事態をそのままデータとしてコンピューターに入力し、ラガーディア空港へ引き返して成功する確率は？テターボロ空港に緊急着陸して成功する確率は？それについてシュミレーションしても意味がないのでは？なぜなら、そこでは機長の人間としての驚きや恐怖さらに思考上の迷い等々が計算に入れられていないからだ。そして案の定、多くの人々が

視聴する中スクリーン上ではラガーディア空港への引き返しもテターボロ空港への緊急着陸も高確率で成功と出されたから、サリー機長は大変だ。そんな状況の中、サリー機長はいかなる主張をして自分の決断が正しかったことを立証するの？

法廷劇ではこんな場合、弁護人の筋道立った弁論とそれを立証する証拠の提出がポイントになるが、本作ではそれをサリー機長が自らやることになるので、それに注目！もっとも、いかにサリー機長が正当な主張（弁解？）をしても委員長がそれを採用しなければ無意味だから、法廷における裁判長の訴訟指揮と同じように委員長の指揮のあり方が重要だ。しかして、スクリーン上に見る委員長の指揮の様子は・・・？

## ■□■短い、無駄がない、力強く優雅！■□■

私が愛読している日経新聞『私の履歴書』の2016年9月版に登場したのは、牛井の吉野家の安部修二社長。吉野家は「早い、安い、うまい」が売りだが、米国の狂牛病（BSE）騒動やデフレ経済の中での安売り合戦等の中で倒産の危機まで経験した。そんな吉野家にアルバイトで入社して某店の店長になり、その後次第に頭角を現して最終的には社長の座まで上り詰めたのが安部修二氏だ。それを読んでみると「早い、安い、うまい」の3つにもその時代に応じて順番の変更があったらしい。それはともかく、本作のパンフレットの「REVIEW」には芝山幹郎氏（評論家）の「プロが描いたプロ」があり、その冒頭で本作を「短い。無駄がなく、力強く優雅だ。」と評しているが、私は全く同感だ。

本作のパンフレットにはクリント・イーストウッド監督の約40本のフィルモグラフィが載っているが、それらの作品で一貫しているのはテーマが明確なこと、そしてそのテーマに集中するため無駄をそぎ落としていることだ。『父親たちの星条旗』（06年）（『シネマルーム12』14頁参照）、『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマルーム12』21頁参照）は異例の2部作になっているが、これはアメリカ側と日本側双方の視点から硫黄島の激戦を描いたためで、テーマの明確性にはいささかの揺るぎもない。また、同2部作のような歴史を描いた大作ではなく、1人の人物に焦点を当てた、近時の『グラン・トリノ』（08年）（『シネマルーム23』48頁参照）、『J・エドガー』（11年）（『シネマルーム28』未掲載）、『インビクタス／負けざる者たち』（09年）（『シネマルーム24』27頁参照）、『ジャージー・ボーイズ』（14年）（『シネマルーム33』290頁参照）、『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマルーム35』24頁参照）等では、テーマの明確性をより一層徹底させているのでそれに注目！

## ■□■このさわやかさは、民主主義の洗礼を経てこそ！■□■

しかして、2009年1月15日に現実に起きた事件で一躍ヒーローになった実在の人物に焦点を当てた本作でも、テーマの明確性と無駄のそぎ落とし方は徹底している。私は「映画評論」を書くについても、「事務所だより」を書くについても、更には「都市法の解

説本」の原稿を執筆するについても、「あれもこれも書きたい」という気持ちが強く、一定の字数やページ数に抑えるのに苦労する性分だが、クリント・イーストウッド監督はそうではないらしい。そのため本作は96分という短い時間に収められているから、誰でも集中してスクリーンに目を向けることができるはずだ。

それにしても航空機事故ともなると、日本では1985年8月12日に群馬県の通称「御巣鷹の尾根」で発生した日本航空123便墜落事故（乗員乗客520名死亡）をはじめとして悲惨なものが多いから、本作のさわやかなハッピーエンドには心が晴れ晴れとするはずだ。そしてそれは、国家運輸安全委員会（NTSB）のサリー機長をヒーローの座から被告人の座に据えかえるような扱いをしてまでの徹底した真相究明の努力を経た上で無罪放免となったからであることが本作を観ればよくわかる。つまり、本作のハッピーエンドのさわやかさは、アメリカ流の徹底した民主主義を経てこそそのものだということだ。そう考えれば、現在真相解明中の東京都の豊洲市場問題についても、徹底した調査を経てそれなりのスッキリした回答を出してもらいたいものだ。

2016（平成28）年10月6日記